



医療法人財団 國道会

十条武田リハビリテーション病院

No.19

きづな

地域連携情報誌 「きづな」 No.19 平成30年9月1日発行

手外科センター センター長 就任のご挨拶

手外科センターを開設
専門スタッフによる
最先端の治療と
高度なリハビリで
繊細な「手」の疾患に
チームで対応しています



このたび、十条武田リハビリテーション病院に手外科センターを開設するとともに、センター長に就任しました河野茂です。

当センターが対象とするのは、肘から指先までの骨・関節・靭帯・神経・血管と多岐にわたります。

外傷性の疾患では、橈骨遠位端骨折、舟状骨骨折、舟状骨偽関節、有鉤骨骨折、肘関節骨折、骨性・腱性マレット指、TFC損傷のほか、さまざまな骨折、骨折後変形治癒、腱損傷、靭帯損傷、関節脱臼などがあげられます。

また、母指CM関節症・遠位橈尺関節症・ヘバーデン結節・ブシャール結節などの変性疾患、ばね指・ドケルバン腱鞘炎などの炎症性疾患、手根管症候群・肘部管症候群・ギオン管症候群などの神経障害、キーンベック病などの骨壊死疾患、野球肘・テニス肘などのスポーツ障害、ガングリオンや手の腫瘍にいたるまで様々な疾患を対象としています。

これら手外科疾患・外傷の患者さんに対し、診療スタッフ3名で最先端の専門的治療、極めて高度なリハビリテーションを提供しています。

私は小学生の時に肘の骨折を受傷し、住んでいた神戸市で最も大きな病院の整形外科を受診しました。ところが上手くいかず、今も肘は変形して曲がらず、指はしびれた状態が続いている。私のような例が少しでも減るよう願い、「手外科」を志しました（本当は、だまされて引きずり込まれたという説もあります）。

前任の病院では、年間150例ほどの手外科手術を行っておりました。手の構造はきわめて複雑で、またその機能は非常に細かく、少しの怪我でも手が使えなくなると非常に不便です。手の怪我や痛みで困っておられましたら、ぜひ一度、当センターの手外科外来を受診ください。どうぞ宜しくお願ひいたします。

河野茂センター長 プロフィール

右肘の変形にめげず
左腕を鍛えて、甲子園を
めざしていました。この体験
をもとに、患者さんの気持ち
に寄り添った治療となるよう
努力しております

日本整形外科学会：整形外科専門医
日本整形外科学会：脊椎脊髄病医
日本整形外科学会：運動器リハビリテーション医
京都府立医科大学大学院医学研究科
運動器機能再生外科学(整形外科)臨床准教授

1990年	京都府立医科大学医学部卒業、同年同大学整形外科学教室入局
1992年	ユニチカ中央病院 整形外科医員
1993年	京都府立医科大学大学院入学 同年 神戸大学医学部解剖学教室国内留学
1995年	京都大学医学部解剖学教室国内留学
1997年	京都府立医科大学大学院卒業 同年 社会保険京都病院 整形外科医員
1999年	明石市立市民病院整形外科 医長
2001年	西陣健康会堀川病院 整形外科部長
2007年	京都府立医科大学 整形外科講師
2008年	社会保険京都病院 整形外科部長・リハビリテーション科部長 同年 京都府立医科大学臨床准教授
2014年	京都鞍馬口医療センター 整形外科部長・リハビリテーション科部長
2015年	京都武田病院 整形外科部長
2018年	十条武田リハビリテーション病院 手外科センターセンター長 就任

私が開発した橈骨遠位端ハイブリッドロッキングプレートを用いた合併症の少ない治療を行っています



手外科センター
河野茂 センター長



高齢で骨が弱くなった患者さんの場合、一度固定しても、やがてネジが抜けてくるケースがあります。抜けければ当然、ズレてしまう。こうしたケースでも、絶対抜けないように弱い骨でも固定するのがロッキングプレートで、現在の主流となっています。

この、ロッキングプレートには大きく2種類あります、一つは一方にネジを固定するタイプ。もう一つはネジの方向に自由な角度を持たせたタイプです。

固定式だと、決まった方向にしかネジが進みません。この骨に固定したいと思っても、自由度がありません。ケースによっては、プレートを固定すべき位置では、ネジが骨から突き出てしまうため使えないこともあります。ただ、方向が決まっている分、ネジの固定力が強いので安心できます。

これに対し自由度の高いプレートは、様々な位置に固定できるので、対応力が広いと言えます。ただ、全部が自由だとネジ同士が当たる可能性もあるなど、自由度が高いために手術が難しくなることもあります。また、ネジの固定力が弱いことも問題となります。



整形外科
岸田愛子 医長

患者さんの生活スタイルに合った治療をめざす

患部だけを診るのではなく、患者さんの生活を含めてトータルで評価し、ベストな治療をご提供すること大切にしています。

具体的には、「この患者さんのお仕事はこうだから、目指すゴールはここです」であるとか、「この患者さんはご高齢なので本来必要となる十分なリハビリテーションは難しいけれど、せめてこれぐらいは家で出来るように」といった判断です。このため、例え同じ術式であっても、リハビリテーションの内容が変わったり装具が必要となりすることもあります。病院で見えてることだけで判断するのではなく、ご自宅での生活を考慮し、そこにできるだけ近い状態に戻れるよう、患者さんと話し合いながら、一緒になって治療を進めていけるよう努力しています。



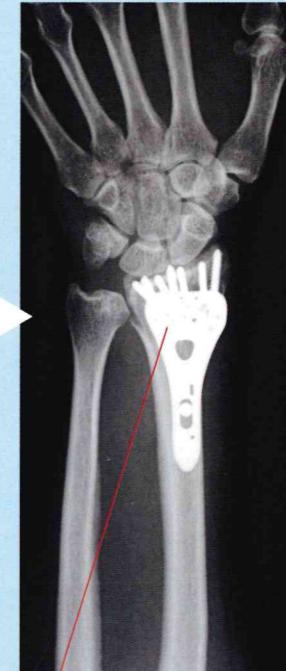
注目ポイント1 理想的な位置（関節の直下）にネジを入れ固定できる

術前CT画像



転落して受傷し来院されました。関節面が粉碎して大きくズレた骨折で、適切な位置で軟骨下骨を支持するのが難しいケースです。

術後X線画像



ハイブリッドロッキングプレートを関節直下に固定しています。

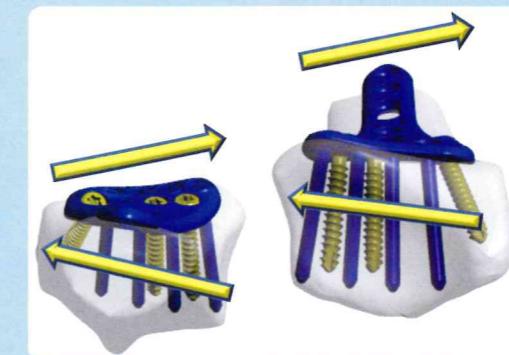


1列目は強固に固定します。
2列目は自由度があるため高い対応力を発揮します。

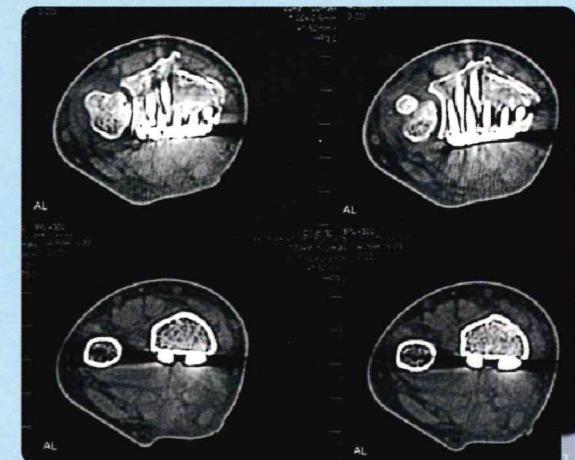
■ 左のCT画像のような粉碎骨折のケースでも、ハイブリッドロッキングプレートを用いた固定支持が可能です。



注目ポイント2 橈骨に沿う“逆位相”を採用した世界初のプレート



骨は平面でなく、とくにプレートで固定したい部分は逆向きの傾斜となっています。
ハイブリッドロッキングプレートは、解剖学的な遠位・近位の逆位相の捻れを再現しており、骨表面と良好な適合性を持つことができます。



術後CT画像：どの位置でもハイブリッドロッキングプレートが骨に密着しています。

リハビリテーションQA



多くの専門家がそれぞれ高いレベルで力を発揮するのがセンター医療と考えられます。今回は、治療に欠かせないリハビリテーションについて、手外科センターの内座保弘作業療法士にお話を伺いました。



リハビリテーション科
内座保弘 作業療法士

Q リハビリで最も大切にしていることは？

A 適切な時期の適切な刺激です

一般論としては、最初は腫れを引かせることを徹底します。骨折であれば、骨癒合期間に合わせて、医師の許可が出てからリハビリテーションを開始します。ここで、適切な時期に適切な刺激が関節に入らなければ、効果があがりません。



Q 「時期」の判断は難しいのですか？

A 経験が必要だと言えます

腱が切れるのを警戒して適切な時期に踏み込んだ施術が行えず、リハビリの効果が上がらないという話をよく耳にします。

例えば、伸ばす方の筋は力を入れてもまず切れないのですが、屈筋と呼ばれる曲げる方の筋は、時期が早い段階で力を入れると簡単に切れてしまします。これを過剰に警戒すると、固まってしまうのです。

私どもは、切れないように患部をガードしながら、タイミング良く自ら動かす「自動伸展」とゴムで引っ張る「他動屈曲」を行っています。回復してきた腱の強度に合わせて動かしていくことで、ゴールである“日常で必要となる生活動作”につなげていきます。



Q リハビリがめざすゴールとは？

A 責任を持って患者さんをリードし続けていくことです

家で料理が出来るようになるとか、お仕事をされている方はそれに必要な動作が出来るようになることは治療としてのゴールです。

ゴールに患者さんが辿りつくよう責任を持ってリードし続けていくことが、私たちの“仕事”です。関節の動き具合だけを見っていても患者さんのモチベーションは上がりませんよね。一つひとつのリハビリが、目標にちゃんとつながっているか、患者さんが理解できるようにリードしていく必要があります。

リハビリは患者さん自らが取り組む必要があるため、時には自宅訓練用の装具を作成するなど、自主訓練の環境づくりを行いゴールをめざしてもらいます。

医療法人財団 医道会 十条武田リハビリテーション病院

〒601-8325 京都市南区吉祥院八反田町32番地

TEL: 075-671-2351 (代) FAX: 075-671-2961

URL: <http://www.takedahp.or.jp>

診療科目 内科・循環器内科・脳神経内科・呼吸器内科・消化器内科
外科・整形外科・脳神経外科・泌尿器科・リハビリテーション科
心療内科・皮膚科・麻酔科・糖尿病内科・リウマチ科
肛門外科・放射線科

受付時間 午前診8:30~12:00/午後診12:30~16:00/夜診16:30~20:00

診療時間 午前診9:00~12:00/午後診13:00~16:00/夜診17:30~20:00

地域医療連携室より

平素は、当院の診療に多大なご理解とご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

私ども地域医療連携室は、地域の医療機関、保健機関、福祉機関とのより良い連携のもとに診療を進めていくたいと考えております。

今後もスムーズな医療連携が図れるよう努力する所存ですので、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

TEL 075-671-2523 (直通)
FAX 075-671-2654 (直通)
E-mail renkei-j@takedahp.or.jp